

総合学習（人間領域）

田川信子 木戸寿和子
松中基 坂江一郎
浅田幸子 中川岳
長谷部学 小林弘二

1 領域の目標

人間領域では、全体論の総合学習でめざす「共に生きていく社会や環境に自らの活動を通して働きかけ、新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと」に迫るため、以下の目標をたて具体化していくことにした。

一人一人が 互いを尊重し合うことの大切さに気づき 他とかかわり合いながら
よりよく生きようとする態度を育む

人が生活する社会においては、人は人とかかわりのなかで生きている。人はそれぞれ感じ方が違い、見方や考え方が違う。また、同じである場合もある。さまざまな人が、それぞれに人とかかわってよりよい人間関係、よりよい集団、よりよい社会を築き上げていくには、違いに対して排他的であってはいけない。自分が社会における大切な一人であると同様に、他者も大切な一人なのである。人と人とかかわりの中で、互いの違いや同じところを認め合いながら、みんなが生きる社会を共有していくことが求められる。そのようなかかわりを持つていくことができるようになることで、共に生きていく社会や環境に自ら働きかけ、よりよく生きていこうとする自分創りにつながっていくと考える。

2 活動を構成するにあたって

(1) 取り上げた視点について

今年度は、視点として、「命」と「交流」を取り上げる。

はじめに、一つめの視点、「命」についてである。目標にある「互いを尊重し合う」というときには、その前提として自分自身を大切にできることが求められよう。自分の命はもちろん、生活において自分らしく生きていけるような自分の存在がなければならない。自分を大切にすることからこそ、他者に対しても自分と同じように大切に尊重していかねばならないという考え方がかかわっていくことができるのである。このようなことから、1つの視点として、「自分らしく生きる」ということまでを含んだ「命」を取り上げることにした。この命については、いつの時代においても、その尊厳にふれ大切にしていくものとして扱っていくことが必要とされている。自分らしく生きるということについては、生涯学習の面から見てもますます重要な視点となってきたといえよう。

次に、二つめの視点、「交流」についてである。社会（地球）にはいろいろな人が暮らしている。お年寄り、障害を持つ人、いろいろな国の人などさまざまである。さまざまであれば当然、感じ方や見方・考え方が違う。違いばかりではなく共通の部分もあろう。そんな人とかかわってよりよい社会を築いていくことが、今後ますます重要になってくる。そこで、ふだんふれあう機会が少ない人たち（障害を持った人や外国の友達）と交流し、どういう立場の人であっても互いを尊重していくことの大切さに気づいていけるような素地を作っていきたいと考える。

以上、2つの視点にもとづき、学年間の系統性を考慮し、具体的な内容を考えた。それぞれの内容においては、ボランティアなどの活動も可能となるように考えている。学年ごとの内容については、別に掲載する年間計画を参照されたい。

(2) 学びを広げ深めるために

全体論では総合学習の単元を構想していくときに、①体験的活動を取り入れる、②学びの個性化を推進する、③学びの個性化に合わせて環境を整備することの3つを留意点としてあげている。そこで人間領域では、それぞれを次のように考えて単元を構想していくようにした。

① 「体験的活動を取り入れる」について

命にかかわっての体験的活動として、家族の人に直接聞き取る活動や、専門的な知識を持つ人とのディスカッション、疑似体験としてのロールプレイングなどがある。いずれも人と直接関わるなかで新しいことを感じたり、見方や考え方を広めたり深めたりしていく活動であるといえる。このような活動をしていくときには、知りたいという気持ちを高めておくことや追求している方向を明確にしておくことが必要である。さらに、中途半端な活動で終わらないように、時間的なゆとりを持ち、子どもも教師も精神的に安心して活動ができるようにしたい。

交流にかかわっての体験的活動として、直接ふれあうことができる活動も考えられれば、互いのものやこと、共通のものやことなどに対する見方や考え方を媒介として間接的にしかふれあえない活動も考えられる。どちらの場合であっても、相手をより意識した計画にもとづき、心にゆとりを持って活動をしていくことが必要であると考えられる。また、ふれ合っていく活動は、その機会が多いほど望ましく、相手をより意識していくときには対象をできるだけ絞っていく方が、子どもにとってより意味のある活動につながる。

② 「学びの個性化を推進する」について

人間領域において、学びの個性化を推進する一つに、問題を解決していく方法に個性化を図っていくということが考えられる。解決を図るために自分自身が何にアクセスして活動していくかということや、活動の順序をどうするかということ、表現していくときの方法をどうするかということなどにその子なりの方法を求めることができる。したがって、そのような場において、自分なりにやりやすい方法や得意な方法、興味のある方法で行動していけるように働きかけていくことを大切にしていかなければならないと考える。

一方、方法の個性化だけではなく、問題となることに対して自分なりの見方や考え方の違いを認めていくということもある。高学年で取り上げる生命にかかわるような内容では、全員が共通の価値観でものを見ていくのではなく、見方や考え方が共通する友達や相反する友達と考え方をぶつけ合っていくことを通して、自分の価値観を見つめ直したり一層深めたりしていくことが大切なのである。

学びの個性化を図り、より一人一人が自らの活動となっていくよう、また有機的なかわり合いが生まれるよう、先に述べたゆとりある単元計画のもと、状況に即応しながらの適切な支援の在り方に留意したい。

③ 「学びの個性化に合わせて環境を整備する」について

命にかかわっては、子どもが自らの見方や考え方を掘り下げたり変容したりしていくことができるように、より専門性の高いゲスト・ティーチャーを求めたい。ゲスト・ティーチャーは、単独で招くより、可能な限り、違う立場で事象をとらえていると考えられる複数の方を招くことが有効である。そうすることで、子どもの考えがゆれ、物事をより一層深く考えることにつながっていくと考えるからである。招く際には、学習の内容やどの段階で招くのかということなどの連絡をしっかりとることが求められよう。ゲスト・ティーチャー以外に、地域や家庭との連携を図ることも大切にしていきたいことである。

交流にかかわっては、交流相手との連絡を密にし、子どもの必要に応じた活動ができるだけ可能になるようにしていかなければならない。そして直接かかわることができるときにはどのような活動が可能なのか、間接的にしかかかわれない場合はどのようなかわり方ができるのかということをも具体的に計画しておくことが必要であろう。姉妹校との国際交流に際しては、ことばの問題も考えられる。そのようなときには附属学校園の特徴を生かし、英語科の学生の協力を求めていくことも視野に入れておきたい。

子どもが目的に向かって活動しているときには、活動そのものが停滞しないように、ティーム・ティーチングで対応していくことも単元を構想する際に留意していきたい。